

かすかべ ちめい
春日部の地名

春日部市内の高台地域（内牧・花積台地）はなづみの関東ローム層地帯には、縄文時代（数千年前）から人が住んでいた。（花積貝塚では人骨が発見されている。また、台地では縄文土器の出土が多数あり集落遺跡も多かったと推定される）

弥生時代になると、水田を中心とした農耕作業が行なわれるようになり（市内で弥生時代の土器も発見されている）、四世紀頃になると大和朝廷が進出して国造くにのみやつこが統治するようになった。各地に、朝廷の属地としての子代名代等こしろなしろの部べという屯倉みやけが設けられた。

春日部とは名代部あなかんであつて、安閑期（五三四年）に設けられた品部ほんちべの称号で、安閑天皇の妃春日皇后の御名を附した御名代部みなしろべであろうと推定される。これが春日部の地名の起源であると考えられている。

春日部氏は、平安朝時代武内宿弥たけのうちすくねの後裔で、紀臣族きのおみ（朝廷に仕えた高家である）の遣唐使 参議 醍醐天皇待読 歌人後撰作者 紀納言長谷雄はせおの子孫、武蔵才守実重の子で、実春は大石を清実は品川氏を左衛門尉実高が春日部氏を実元が潮田氏を実能が堤氏を起こした。実高は在地名春日部の姓を称した。今より七四二年前嘉禎二年（一二三五年）に春日部氏の名が史料にあらわれている。

春日部重行は、それより約百年後の建武二年（一二三五年）に戦死したことがあきらかである。

春日部氏は、この地方を統治していたことが「古文書」からもうかがい知ることができる。それまでの間に春日部氏の者が現愛知県春日井市の地頭職を勤めたこともあり、従来の説は春日井より春日部に来た如くに伝えられていた。

春日部の地名について粕壁が発祥地の如く伝えられたのは、春日部氏の城館が浜川戸にあったので伝えられたようで、春日部は広域であったことが推定される。地名については、中世の文書の中に種々異った文字を使用している。

(1)延元元年（一三三四年）下総國埼玉郡春日部郷

(2)延元元年 下総國葛飾郡下河辺庄春日部郷

下総国とあるのは利根川（現古利根川）の流域の変化によって、下総国に入れられたものと考えられる。

(3)嘉吉三年（一四四一年）武蔵國埼玉郡春日部

(4)元龜元年（一五七一年）武蔵國埼玉郡糟ヶ辺

かすかべ

(5)天正十七年（一五八九年）武蔵國埼玉郡糟壁

(6)正保年間（一六四五年）武蔵國埼玉郡粕壁町

(7)元禄年間（一七〇〇年）武蔵國埼玉郡粕壁宿

近世以降明治初期まで粕壁宿であった。

明治二十二年、市町村制施行により埼玉県南埼玉郡粕壁町となった。昭和十九年内牧村と合併して春日部町と改められた。春日部の地名に改正しようと江戸時代と大正初期に運動されたことが書類に残されている。

初出「広報かすかべ 昭和五十四年一月」かすかべの歴史余話